The Saitama Municipal Urawa Museum

みんかえんだより

第23号

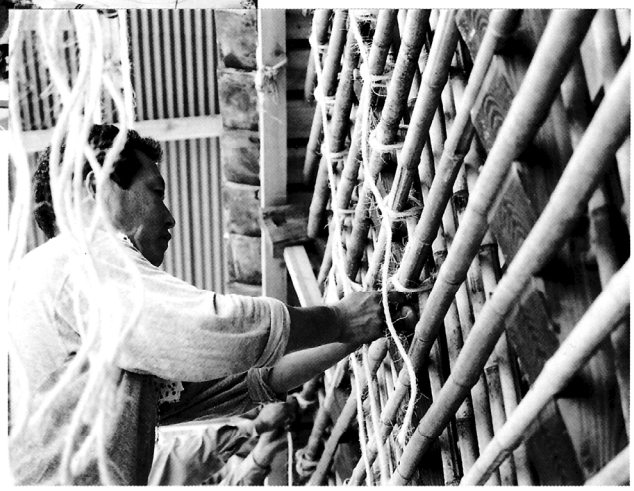
2002. 10

of Traditional Architecture News No.23

浦和くらしの博物館民家園館報

職人の技

▲ 瓦を葺く



小舞に縄をかける ▶

旧綿貫家住宅の復原工事は多くの職人さんの手により造られています。解体から携わっている大工さんは秩父の宮大工の皆さん。瓦は児玉の職人さんで、新旧の瓦を巧みに組み合わせてくれました。壁を作る職人さんは、群馬県千代田町の方で、大壁の技術を受け継ぐ数少ない左官屋さんです。

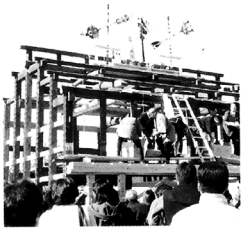
この他、基礎と大谷石を設置してくれた土建屋さん。建具を作成してくれている職人さんもいます。このような多くの職人さんによって、旧綿貫家住宅は復原されています。

旧綿貫家住宅移築復原の進行状況　－２－

前号では、解体から上棟式までを報告しましたので、今回は上棟式後の造作から屋根葺きまでを紹介します。

●　土壁の準備

上棟式の際にも見られましたが、土壁を塗るための壁下地として、柱と柱の間に貫と呼ばれる横材を通します。貫は全て新しい材を用い、柱からはずれないようにクサビで固定をしておきます。ここまでが、大工職の仕事です。この後の細竹を縦横に組む小舞は左官職の仕事になります。



▲ 右側面に貫が見られる（上棟式）

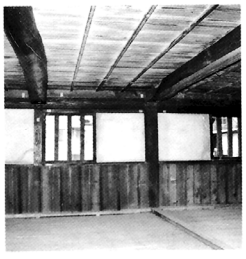
▲ 柱と貫（クサビで固定）

●　天井

旧綿貫家住宅には、屋根裏を利用した「つし」と呼ばれる２階があります。この２階の床板は、床板と床板を支える木材とともに１階の天井を構成しています。「根太天井」と呼ばれるもので、部屋の中央、桁方向にかかる床梁（大引）に根太と呼ばれる横材を約45cmの間隔で直交させて取り付け、その上に上の階の床板を張っていきます。

根太天井は、民家で広く用いられていた天井で、根太天井があるということは、そこに２階があることを意味します。また、主に実用的な部屋に用いられていたとされ、旧綿貫家住宅ではミセの部分で使用しました。

▲ 根太天井



▲ 竿縁天井（解体時）

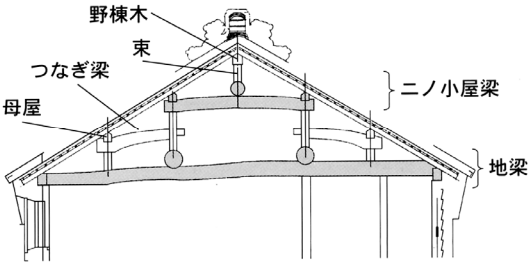
一方２階は、当初は物置として使用していたため天井がなく、小屋組が直接見える構造になっていたようです。使用人の部屋として使用する時に約３cm幅の細い角材を45cm程度の間隔で並べ、その上に薄板を直交させて敷き並べる「竿縁天井」という形式の天井を作ったと見られます。そのため、天井は低く、小屋梁も天井に現れています。復原に際しては、当初の姿ではなく竿縁天井を取りつける予定です。

なお、この竿縁天井も広く民家で使用されてきたもので、主に接客座敷に用いましたが、その後、居間や寝室にも使われるようになりました。

●　屋根葺き準備

旧綿貫家住宅は切妻造り・土居葺きの建物で、民家園に移築された民家では初めての瓦葺きの住宅です。復原に際しては、軒先部分は小さめの敷平瓦の上に軒瓦を葺いた土居葺き（葺き土のみで葺く）を、その他は桟に葺き土を乗せ、銅線で締めながら葺く桟瓦葺きを行いました。

屋根を支える小屋組は、基本的には「京呂梁」といわれる梁組で、柱・桁・梁の順に材を積み上げていきます。一間おきに３本の地梁を用い、その上に束を立てニノ小屋梁を組みます。地梁と小屋梁は束とつなぎ梁で固定されます。ニノ小屋梁に束を立て、野軒木を乗せて小屋組は完成します。



屋根を葺くためには、この小屋組に垂木を架け、野地板を張っていきます。垂木は棟の上で合わせ、棟から小屋組の束の上に桁方向にのせた「母屋」の上をとおって軒まで、角材を45cm間隔に組んでいきます。その垂木の上に、野地板と呼ばれる薄い板を桁方向に釘で止めていき、防水のため、杉皮、さらに防水シートを張り、土留めの押え桟（瓦桟）を桁方向に取りつけました。ここまでが大工職の仕事です。

～壁・天井・屋根～

●　瓦葺き

屋根の下地が終わると、いよいよ瓦葺きです。

旧綿貫家住宅の屋根瓦は、もともと地瓦が葺かれていました。瓦の寿命は50年から100年といわれていますが、それ以上に使用されている瓦もあります。そこで、旧綿貫家住宅の瓦も再び使用できるように丁寧に取りはずしを行いました。しかし、長い年月風雨等にさらされた瓦は痛みが激しく、今後も使用に耐えられる瓦のみを残して新たに瓦を用意しました。本来であれば、地瓦を使用するべきなのでしょうが、旧綿貫家住宅と同じ規格の瓦を用意できないということで三河の三州瓦を使用しています。

屋根葺きは、屋根の中央を決め、地割りをした後、向かって右下から葺いていきます。地割りとは、瓦を何列に葺いていくかなどを決めることです。屋根の両端２列は古い平瓦を、中は新しい桟瓦を用いて、押え桟に良質の粘土を主とした葺き土をのせ、銅線で締めながら葺いていきます。

平瓦と平瓦の間、平瓦と桟瓦の間には、紐丸瓦を置きます。屋根のアクセントになると共に、下からの吹き上げに対して重しともなります。最後に鬼瓦を乗せ、棟の部分を葺いて仕上げます。

▲ 平瓦を葺く

▲ 棟の瓦を葺く

●大谷石貼り付け

屋根が葺き終わると、壁の本格的な作業に入るために全体に覆屋を掛けました。また、基礎の回りには大谷石を取りつける作業を行いました。本来は基礎に大谷石を使用していましたが、補強のため基礎を鉄筋コンクリートとしたため、外見上移築前と同じになるよう、また「腰巻き」という外壁の下から90cm位までを厚く塗り込めた部分をつくるための土台として、大谷石を貼りつける作業が必要となりました。

●　小舞

土壁の下地である小舞（竹を縦横に組む）の作業を「小舞かき」といいます。旧綿貫家住宅は塗り屋造りのため、小舞は柱まで塗り籠めた「大壁」となるので、貫の下15cm前後のところに「尺八」と呼ばれる細い丸竹を柱の穴に入れ、水平に渡していくことから始まります。

▲ 尺八の取付け

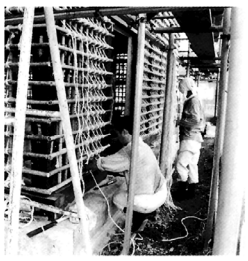
▲ 小舞かき

尺八を入れ終ると、柱間に６本、10cm前後の間隔で丸竹を土台から屋根裏まで縦に、横竹と尺八との縄がらみとします。横に入れる竹はスサカケ（柱の切り欠け）に掛けていきますが、竹の長さが足りないため１本置きに竹の向きを替えて取り付けていき、足りない部分を他の竹でつないでいきます。小舞の一部分が細い竹にならないための工夫といえます。また、縦の竹は尺八や貫と横に掛けた竹にはさまれた状態になります。

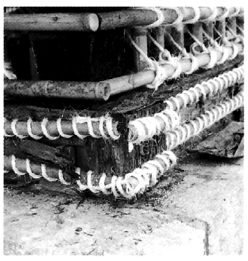
使用する竹は、３年以上たった真竹で昨年の12月に伐採したものを使いました。

縦横の両方の竹が交わるところは、麻縄を用いて結びます。結び方は、解体前と同じ結び方で結び、土壁を塗るための下地としました。

また、土台や貫などには防腐のため、杉皮を張り、半分に割った竹に麻縄をからめた「巻竹」を押さえとして釘止めし、下地としました。



▲ 縄かけ



▲ 杉皮張り